

Rio

リオ
豊田市矢作川研究所 月報

CONTENTS

- アユにつられて矢作川
- 里山体験 in 足助
- 今月の一枚
- 「川と暮らしの記録展」報告
- 2003 川会議が開催されました
- 研究所の調査風景

2003 June
No.62

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F

TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028

homepage <http://www.hm.aitai.ne.jp/> yahagi/index.html e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

*Rioはホームページ上でもご覧になれます

アユにつられて矢作川

辻本哲郎

アユを釣りに矢作川に来る方が多いと聞くが、小生はアユにつられて矢作川にかかわった。誕生日が6月中旬であったため、ものごころついてから、あじさいの花とアユの塩焼き（金沢にいたときは残念ながら解禁になっていないときもあったが…）が自分の誕生日を祝ってくれた。もっとも生まれが奈良なので、紀ノ川上流の吉野川のアユだが…。アユの食し方も、奈良や京都と中部圏ではまた違っても、どちらもそれなりに風情と香りがたまらない。残念ながら台北で食べたアユは、コイと同じようにから揚げして野菜のあんかけになっていたが…。

前書きが冗長になったが、アユにつられて、矢作川とかかわりを持ったと思ったら、今度は2000年9月に東海・恵南豪雨。河川工学という専門性でもかかわりが出来た。

新幹線でわたる矢作川は、砂河川の様相を呈し、砂州の様々な形もヤナギの群落とのコントラストもなかなか興味深く思っていたが、豊田市あたりの礫床、あるいはその上流では連続して設置されているダム・堰のため、さまざまな川の様相を呈している。また、発電や農業用水取水で人の生活やそれにかかわる利害関係が複雑である一方で、川を愛する市民がいること、まさに河川そのものも含めての流域運命共同体だ。治水安全性、適正な水資源配分などに加えて河川の成り

立ちとその上の生態系への場の提供など、自分の研究対象としての興味が尽きないことに加え、「健全な流域圏」構築の課題の重要性とそれへの取り組みの難しさを矢作川を舞台にいまさらながら感じているこのごろである。

3月に京都・滋賀での世界水フォーラムがあったが、わずかな水やエネルギーがないために悲惨な生活を強いられている地域、洪水の危険に否応なくさらされている地域、一方では環境破壊の視点でのダムへの大きな不信感、水問題への多国籍巨大産業進出の是非など、流域と水にかかわる問題の多様性とスケールの大きさを思い知らされた。これらのどれを捉えても、その最大の敵は、戦争と帝国主義的感覚だ。懸命の人知の努力の積み重ねを一気に吹っ飛ばすこれらは許しがたい。それをあえて言わないで、小さな流域でいがみ合うことのむなしさもいかんともしがたいものだ。やっと、環境問題が「保護」から「保全」へそして「共生」へとその考え方をステップアップさせてきた。保護とは征服のあとにあるもの、保全には理解や思いやりがいるし、共生には相互理解・相互の尊重 (mutual appreciation) が必須である。人と自然が共生する、いわゆる「自然共生型流域圏構築」がうたわれているが、矢作川流域圏をその一つの先進事例にしたい。

(つじもと てつろう、

名古屋大学大学院工学研究科 教授)



山本 薫久

手塚治虫の漫画「どろろと百鬼丸」をご存知でしょうか。時は戦国時代、百鬼丸の父親は立身出世のため多くの妖怪から力をもらいます。その見返りに産まれてくる百鬼丸のあらゆる体の部分を妖怪たちに与えるという約束をします。

産まれた百鬼丸は川に流されるが、運良くある男に拾われます。失われた体の部分は人工物で代用され、本人の力もあってスーパー能力をもちます。百鬼丸は成人すると次々と妖怪を倒し、失われた本当の体を取り戻していくのです。それと引き換えにすぐれた人工物の代用品、スーパー能力も失っていきますが…。

この漫画の物語は、ある意味私自身のことだと思っています。現代人は「文明」という便利さと引き換えに、衣食住の直接の営みから遠ざけられ、自然とかかわる営み・自給自足の力を失ってしまいました。少し前まで、衣服の木綿も絹も自分たちで生産していました。



食料も住居も身近な地域で自給できていました。自然とかかわり暮らしを築いてきた思想と技術、人間関係が息づいていました。そこでは、樹木も草も虫も動物も天候もわかり、親しく、あるときは愛おしいものであったと思います。私は百鬼丸と同様、本当の

自分を取り戻すべく、自然とかかわる営み、自給自足の力を培いたいと思いました。



そのはじめに自然農（不耕起・不施肥・無農薬）による米作りを学び実践してきました。この農の基本は「何も持ち出さない、何も持ち込まない」という田んぼの生態系を大切にし、その営みの中で米を作るというものです。従って、そこにいる虫や草たちを敵と見るのではなく、共生関係の中で見ていくのです。もちろん栽培なので、稲が他の草に負けそうになるときは手助けをします。この自然農は種おろし（苗床づくり）から脱穀・もみすりまで自前でやります。この自然農の体験者は、自分でも主食である米を作ることができる感動と自信を持ちます。毎日食べているにもかかわらずブラックボックスに隠されていた米の全存在が自分自身のまえにあきらかにされ把握され自分のものとなる。このことのインパクトは大きいです。

自分の暮らしを支えているものが「わかる」し「親しい」し「愛おしい」と心から身体から感じるができること。これが本当の「生きる力」ですし、里山での体験の大きなねらいです。

今年は「自然農IN足助」として足助さとやまユースホステルと提携して広く一般のかたにも参加をよびかけています。

その他、雑木林観察会、炭焼き体験なども同様のねらいで実施していきます。（www8.ocn.ne.jp/~sige/）（やまもと しげひさ、里山企画「PICCOLO」主宰）

ノリウツギの花（田中蕃 撮影）



今月の一枚



展示の様子(「川会議」会場)。
会場の古川水辺公園に隣接する、扶桑町の歴史に
焦点をあてました。

矢作川の今昔比較写真(20点)と、
写真に関連した聞き取りおよび文献調
査結果を、テーマ別に展示し、二つの
会場で13日間公開しました。市役所
ロビーでは約100名の方(パンフレット
配布状況から推定)に、「川会議」
会場では会議参加者の方にご覧頂きま
した。このうち28名、20~80代の世
代の方からアンケートの回答を頂きま
した。

年輩の方々が「胸形神社の松2本が
現在1本しかない:60代・80代、平
戸橋町」、「昔の人達の生活が、なつ
かしく思い出されました:70代、扶
桑町」と具体的に回想される一方で、
若い世代は「環状道路がなかったころ
の様子を知らなかった:30代、技術者」
「岩の大きさに圧倒された:20代、
会社員」など、初めて見る風景として
新鮮な印象を受けたようです。また、
高度経済成長期以降の稚アユの放流量
を表したグラフや、矢作ダム築造後の
川辺の変化を示した展示を見て、「魚
や河川は正直だと思う。最初はなんの
変化もないが、必ず数年後には影響が
出る:20代、大学生」「鮎の放流が



川作矢 研究所 企画展

● 矢作川「川会議」会場(5月10日)

アンケートの結果から

「川と暮らしの記録展」報告

小川
都

● 市役所南庁舎一階ロビー(4月22日~5月9日)



「川会議」会場では、古い写真の撮影場所に写真を展示。
実際の矢作川で今昔比較をしました。

続けられているけれど、人間の欲望で、
釣りをするための放流でいいのか、見
直す必要があると思う:30代、主婦」
といった、河川の現状に対する率直な
意見を投げかける人もいました。同じ
川、同じ景観であっても、見る人々の
経験や個性によって、受け止め方は多
様であることが窺えます。矢作川と人
のよりよい関係を構築するには、多様
な意見を取り入れ、矢作川に反映させ
る必要があります。そう考えると、い
ただいた回答は、矢作川の今後を決め
る重要な手がかりだと言えます。

企画展を振り返ると、観覧者から矢
作川の変化に対する意見が出たことを
成果としながらも、多くの人々にアピ
ールできたかと言えば、まだまだ改善
の余地がありました。「現在の矢作川
の水質状況を他の河川と比べてみるパ
ネルがあると、水の現状が良くわかる
のではないか:30代、教員」「矢作
川の他の地域の移り変わりを見てみた
い:30代、会社員」など、研究や成
果発表に対する意見もいただきました。
矢作川の環境改善のために研究所がで
きることは、調査・研究だけでなく、
このような情報をよりわかりやすく、
おもしろく、公開することであることを
あらためて強く感じました。

(おがわ みやこ、

豊田市矢作川研究所 研究員)

*わかりやすい調査結果の公表を進めていくためには、
皆様のご意見が必要です。川について考えていること、
知りたいことなどを、ぜひ研究所までお寄せください。

展示の様子(市役所ロビー)。
写真や解説とともに、川で洗った養蚕の道具や、鮎の友釣り道具も展示。

2003 川会議が開催されました

去る5月10日（5月第2土曜、「矢作川の日」）に、今年で3回目となる矢作川「川会議」が開催されました。前々日の大雨による増水で、午前中に予定されていたアマゴ釣り大会は中止になりましたが、矢作川歴史探訪と、午後のシンポジウムは予定通り行われました。

310名という過去最高の参加者を集めた今回のシンポジウムのテーマは「次世代に続く川づくり」で、豊田市立西広瀬小学校による特別発表のあと、川を



愛し、川に遊び、学ぶ愛知県内の8つの住民団体の活動報告が行われました。それぞれに個性ゆたかな各団体の活動報告に、コ

ーディネーターの古川彰氏（関西学院大学社会学部教授）、コメンテーターの山道省三氏（「川の日」ワークショップ実行委員会事務局）、谷岡郁子氏（中京女子大学学長）からコメント・質疑があり、その後、裕さくら氏（矢作川「川会議」代表）、梅村錠二氏（矢作川学校校長、当研究所所長）も加えてディスカッションが行われました。

ディスカッションででてきた「いい川=いい男・いい女」論、つまり、「いい男・いい女」の基準が単一的なものだったら殺し合いが起こってしまう、平凡に見える人にもいいところがあって、「全くうちのダンナ（女房）は…」なんて言われながらも、配偶者にとっては魅力的な、かけがえのない存在である…いい川もそんなものじゃないか、という話が印象的でした。

（豊田市矢作川研究所 洲崎燈子）

研究所の 調査風景

4月19日(土)

お釣土場水辺公園で、「春の河辺の花を楽しむ」というテーマで矢作



観察会の様子

川学校の植物観察会を行いました。お天気にも恵まれ、クサノオウ、ムラサキケマン、クサイチゴといった草地の花々や、ニリンソウ、ホウチャク

ソウ、ウラシマソウといった明るい林の花々が咲きそろろう中を、植物の名前や林の成り立ちなどを紹介しながら歩きました。参加された方々は、熱心にメモを取りながら説明に耳を傾けていました。（洲崎）

5月1日(木)

街づくり調査地の千ヨウ類の出現種を確認する調査に出かけました。成虫で越冬したアカタテハ・キチヨウ、幼虫越冬のツバメシジミ・ベニシジ



陽光に映えるヤマトシジミ

ミ・ヤマトシジミ、越冬蛹から羽化したナミアゲハ・クロアゲハ・ツマキチヨウなどが混在して発生していました。春一斉に開花する花々と同様、昆虫類が暦を感じて春の息吹を演出し、私たちの生活に潤いとゆらぎを与えてくれるような環境を、これからも創出していけたらと思います。

（間野）

編集後記

私は底生魚が好きなのですが、最近思わず顔のほころんだニュースが、「どじょうすくい」の安来節で知られる島根県の安来市が『どじょう振興課』を新設、生産量をアップして名実ともにドジョウの町になることをめざし、近く『どじょう研究所』も設立する」というものでした。ユニークな取り組みに注目です。（洲）

ご意見・ご感想をお寄せください